

# 露 草

高 原 典 子

林が新芽のたいまつを燈し、草が萌え立つと、季節を訪ねて歩きたくなる。

和らいだ日射しは、川面にキラキラと照り返し、冬の間病みがちだった子ども達を訳もなくはしゃがせる。

幼い子どもと連れ立って、草の花を摘みながら過ごすひとときには、それだけで不思議に満ち足りてしま

うものがある。私達の歩みは、いつもこれといったあてもなく、時に河原、時に雑木林に向かい、草の花に誘われるまま道らしい花野を辿るだけなのに。

小さな手で摘まれたとりの花を小瓶に差すと、季節がひっそりと生命の詩を歌い出す。

草の花の中でとりわけ好きなのは露草だ。六月の雨の野辺に咲く花びらの藍色は、たとえようもなく美しい。あえかなのではなく、凜とした姿のゆえに。

露草はその昔「月草」と呼ばれ、和歌にも多く詠まれてきた。「つきくさの」という枕詞さえ生まれたのは、花の命の儚さが歌人の心を誘ったからなのだろう。月草で衣を染めた縹色の褪せやすさも、哀の色を深めた。

「枕草子」は、「草」の段を「つき草、うつろひやすなるこそ、うたてあれ」と結んでいる。

薄が「草の花」に数えられているのに、つき草は何故か「花」として扱われていない。「万葉集」からの流れのまま「うつろひやすい」として、「嘆かわしい」とい

う評まで頂戴している。もっとも「万葉集」に咲く月草は情緒の花、「枕草子」では観念の香りがするが。

いずれにしても、露の間に咲く月草の鮮やかな花の色に歌心を委ねるのではなく、月草が、「褪せていく時間」の美しい記号として筆の跡に咲いたのは惜しいことだ。

大田垣蓮月は、幕末から明治にかけての乱世に長寿を刻んだ歌人だったが、月草をこう詠んでいる。

くもまにはまだあり明のつきくさに咲きまじりたる  
あさがおの花

夏の暁の風景だが、珍しく「つきくさ」がすこやかに歌われていて嬉しい。修辭の問題はさて置き、この和歌は、色彩の豊かな静物画ともいえる。月草も朝顔もたった一日の短い命の花だが、咲いている間の最も美しい時に視点が据えられている。それは、書画にも秀で、晩年を埴細工「蓮月焼」に打込んだ蓮月尼ならではの「創り手」のまなざしかもしれない。紛れもなく月草に生命を与え、美しさを凝視めるそれである。

幼な子と夫が次々に身罷った後、黒染の衣を着て五十年もの道のりを歩んだ蓮月だが、月草の藍のように鮮やかに「今」という時の生命を生ききった人だった。

露草は「螢草」とも言われる。

幼い頃、螢は、露草の朝露を飲みに来るのよと聞いていた。裏庭の鶏小屋の傍にひとむれの露草が咲くと、螢が宿っているように思えて覗きに行ったものだ。もちろん花の中に螢が見つかったことはなかった。藍色の露草の野に淡やかな光を放つのは、幻の螢なのだろうか。疲れた螢を憩わせる為にも露草を摘んではいけない、と祖母は言ったのかもしれない。うつろいやすい花への慈しみだったのだろう。